
地獄からの生還者

白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄からの生還者

【Nコード】

N0927Q

【作者名】

白銀

【あらすじ】

人の思念で出来た『地獄』に堕ちた少年が死に物狂いで現世へ帰還します。

けどそこは自分がいた世界じゃない。異世界だった。
あらすじ変えますた

第一話プロローグ

『地獄』。

それは人が考え。恐れ。恐怖し。そして創造^{想像}したもう1つの『地獄』。

その『地獄』は本来の『地獄』とは全くの異質な世界。

本来の『地獄』とは罪有りし魂を裁き。罰し。鍛え。輪廻へと送る場所。

だが異質なるもう1つの『地獄』とは罪なき魂を呼び寄せ異形の化物が日夜罪なき魂と同族を殺し喰らい合う世界。

7つの王と1つの墮神が君臨するまさに『地獄』の世界。

1つの墮神。その名。

『地獄』を創りし者。

『地獄』を象徴せし者。

『地獄』を隠せし者。

『地獄』そのモノ。

7つの王。その名。

『傲慢』
プライド

『嫉妬』
エンヴィー

『憤怒』
ラース

『怠惰』
スロウス

『強欲』
グリード

『暴食』
グラトニー

『色欲』
ラスト

数多の異形の化物とそれを統べし7つの王と1つの墮神。

その『地獄』に堕ちし1人の人間。

彼の少年。

『地獄』に堕ちし『生きている人間』。

異形の化物どもにとって最高の玩具にして最高の食事。

異形の王どもにとって最高の玩具にして最高の食事。

異形の化物とその王どもは彼の少年を殺し。喰らい。取り込むために彼の少年の下に向かう。

だが。

彼の少年は生きる。

彼の少年は必死に生きる。

彼の少年は生きるために戦う。

彼の少年は生きるために必死に戦う。

永い。それは永遠と思えるほどの永い間。

彼の少年は生きるために戦った。

彼の少年は生きるために異形の化物どもを逆に殺す。

彼の少年は生きるために異形の化物どもを逆に喰らう。

彼の少年は生きるために異形の化物どもを逆に取り込む。

彼の少年は生きるために1つ目の異形の王を逆に殺し。喰らい。取
り込んだ。

彼の少年は生きるために2つ目の異形の王を逆に殺し。喰らい。取
り込んだ。

彼の少年は生きるために3つ目の異形の王を逆に殺し。喰らい。取
り込んだ。

彼の少年は生きるために4つ目の異形の王を逆に殺し。喰らい。取

り込んだ。

彼の少年は生きるために5つ目の異形の王を逆に殺し。喰らい。取り込んだ。

彼の少年は生きるために6つ目の異形の王を逆に殺し。喰らい。取り込んだ。

彼の少年は生きるために7つ目の異形の王を逆に殺し。喰らい。取り込んだ。

彼の少年は生きるためにさまざまなモノを手に入れた。

彼の少年は生きるためにさまざまなモノを忘れていった。

彼の少年はそれでも。

それでも彼の少年は生きるために最後の1つ。

『地獄』を殺す。

第一話プロローグ（後書き）

どうも。懲りずに愚行を行う白銀です。

もうここまで来たら俺のインスピレーションの赴くまま突っ走るぜ
！！！！（自棄）

感想お待ちしております？

第二話終結

そこは見る者によつては平穩だろつ。

そこは見る者によつては戦場だろつ。

そこは見る者にとつては始まりの地であろつ。

そこは見る者にとつては終わりの地であろつ。

見る者によつて千変するこの地には共通の異常な2つのモノがある。いや、存在している。

1つは異形の化物。

全ての光を消し去ろうとする程の圧倒的で巨大な暗く、昏い闇を纏っている。

絶対的な格の違いを思い知らされるようなオーラを放っている。

深淵の様な漆黒の6対12枚の翼を持つ悪魔モノのような外見の存在。

1つは平凡そうに見える少年モノのような存在。

黒髪黒目で背もそれほど高く感じない。何も印象が残らない顔。すぐに忘れてしまいそんな印象だ。だが、やはり異常な存在モノなのだ。

息をしているのかと疑いたくなるほど浅く、そして深い呼吸をす

く。

6対12枚の漆黒の羽を持つ存在^{モノ}が翼で身体を覆う。すると、纏っていた闇が凝縮しさらに深き深淵となっていく。

少年のような存在^{モノ}は今まで体を支えていた大剣を片手で頭上に掲げる。

すると、少年のような存在^{モノ}の消失していた右脚と左腕に闇にも光にも見える炎が燃え盛り、そこから痛々しい傷跡を幾つも刻まれた右脚と左脚が再生する。

少年のような存在^{モノ}は再生した腕と脚から炎が消えると両足で踏ん張り両手で片刃の大剣を握り大上段に構える。

すると、禍々しくも神々しい片刃の大剣の剣身が、闇のようにも光のようにも見える炎で覆われ、まるで太陽の様な輝きを放っている。

2つの存在^{モノ}はお互いに睨み付け吠え合いながら力を溜めてゆく。そして。

「霸亜亜亜アアア阿阿阿アアアア！！！！！！」

最初に動いたのは少年のような存在^{モノ}。

まさに神速と言っても過言ではない速度で6対12枚の漆黒の翼を持つ存在^{モノ}に禍々しくも神々しい片刃の大剣を肩に担ぎながら斬り掛かる。

大剣は今にも爆発せん程の莫大な量の闇のようにも光のようにも見える炎を一層輝かせながら敵を斬り裂かんと猛進する。だが。

「ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア!!!!!」

6対12枚の翼を持つ存在も12枚の翼を一気に広げ凝縮していった深淵よりもなお暗く、昏い、深き闇を少年のような存在に解き放つ。

闇は一条の暗く、昏い、深き闇の光と成り少年のような存在（モ）に向
かって突き進む。

少年のような存在は暗く、昏い、深き闇の光が目前に迫ったとき。

暗く、昏い、深き闇の光に向かつて闇のようにも光のようにも見える炎を纏つた禍々しくも神々しい片刃の大剣を振り下ろす。

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ! ! ! ! ! ! !

     

最早2つの存在モノの叫びは意味を持たない。

ただ、勝者が決まるまで叫ぶのみ。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
ン!!!!!!!!!!!!

暗く、昏い、深き闇の光と、闇のようにも光のようにも見える炎を纏った禍々しくも神々しい片刃の大剣との間で耳障りな金切り音を

が発生した瞬間。

パアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

何かが弾けるような音と共に膨大な閃光が巻き起こる。閃光は2つの存在^{モノ}を飲み込みさらに千変の大地をも白に染め上げた。

閃光は徐々に、徐々に晴れて行き千変の大地が色を取り戻す。

閃光の中心部。2つの存在^{モノ}がいる大地には四肢を無くし力なく大地に倒れ伏している存在^{モノ}とその存在の頭部を踏みつけている存在^{モノ}がいた。

四肢を無くし切断面を闇のようにも光のようにも見える炎で焼かれ力なく倒れ伏せているのは、闇が掃われ、その身体から発せられていたオーラは消え失せ、漆黒の6対12枚の翼を焼かれ、地に伏せた悪魔のような存在^{モノ}。

その頭部に足をで踏みつけ、右手で逆手に持った禍々しくも神々しい片刃の大剣を頭部に突きつけているのは左腕を失った少年のよう^{モノ}な存在^{モノ}。

少年のような存在^{モノ}は表情を崩さず冷たく悪魔のような存在^{モノ}を見据える。ただ、瞳が大胆不敵に輝いているだけだ。

すると悪魔のような存在^{モノ}が突然笑い始めた。

「ク、クハ、クハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！」

悪魔のような存在モノは笑っているのだらう。その笑いからは自らに勝った少年のような存在モノへの賞賛。この殺し合いへの賛美。そして、此処で消え去ってしまう自分への罵倒。

悪魔のような存在は笑った。ただひたすらに笑い、嗤って。

「ハハハハア、ハア。……殺せ。」

少年のような存在モは悪魔のような存在モがそう呟くのを聞いた瞬間に禍々しくも神々しい片刃の大剣を悪魔のような存在モの頭部に突き刺す。

少年のような存在モノが禍々しくも神々しい片刃の大剣を悪魔のような存在モノに突き刺した瞬間。悪魔のような存在モノの身体が闇のようにも光のようにも見える炎で覆われる。

少年のような存在モノが禍々しくも神々しい片刃の大剣を引き抜くと闇のような光のようにも見える炎は消え去りると同時に悪魔のような存在モノの亡骸も灰となって消えた。

今この瞬間。少年のような存在は悪魔のような存在を殺し、喰らい、取り込んだのだ。

少年のような存在モが片手で禍々しくも神々しい片刃の大剣を頭上に掲げると消し飛んだ左腕に闇のようにも光のようにも見える炎が燃え盛りそこから左腕が再生する。

少年のような存在^{モノ}は左腕が再生したのを確認すると禍々しくも神々しい片刃の大剣の柄から手を離す。

すると、禍々しくも神々しい片刃の大剣は手を離れた後、暫く空中に浮かびそして淡い光の泡となって消えた。

少年のような存在^{モノ}はそれを一瞥すると周囲を見渡す。

この世界の主を無くした今、この世界は崩壊の最中である。

千変の大地は震え、裂け、砕け、崩壊し、無限の時空の狭間へと落ちて行っている。

空中にはヒビが入り所々では砕け、永久の闇が続く無と常世の狭間を映し出している。

少年のような存在^{モノ}は右手を突出し左から右へ腕を振る。

瞬間。

少年のような存在^{モノ}は先ほどまでの崩壊する空間から何もない真っ白な世界。

世界と世界の境界にいた。

少年のような存在^{モノ}。いや、少年は歩き出す。

この真っ白な世界と世界の狭間。

方位も、どちらに進んだらいいのかも分からないまま。

それでも少年は歩き出す。

全ては生きるために。

第二話終結（後書き）

感想お待ちしております？

第三話狭間の世界

少年は歩く。

ただひたすらに歩いていく。

大地も蒼穹そうきゅうも無い。

真つ白な世界と世界の狭間を歩いていく。

《少年side》

あれから。

『地獄』に堕ちてからどの位の時間ときが過ぎたのか俺はもう覚えていない。

既に思い出せるのは俺の名とあの世界の僅かな知識とあの世界から『地獄』に堕ちた瞬間の出来事だけ。

あの世界での他者の顔も名前も出来事も忘れてしまった。

だが俺はそれでもいいと思う。

人は思い出を忘れるのは必要なことだからだ。

必要でないなら忘れることは無いのだから。

それに必要になったら思い出すさ。

人はそんな風に出来ているのだからさ。

『地獄』での出来事は鮮明に思い出せる。

堕ちた時、最初に襲い掛かってきた化物を見て泣け叫んだこと。

よく覚えていないが返り討ちにし殺し、喰らい、取り込んだこと。
罪なき魂たちから生前の知恵と技術を受け継いだこと。
化物どもの7つの王を返り討ちにし殺し、喰らい、取り込んだこと。
と。

自分の異能の力を使い武器を鍛えたこと。

罪なき魂たちを解放したこと。

そして、1つの墮神を。

『地獄』そのモノを殺し、喰らい、取り込んだこと。

そして今、俺は『地獄』から脱出し、世界と世界の狭間を彷徨い歩いている。

在るかどうかも分からない出口を求め。

この真っ白な狭間の世界を彷徨い歩く。

歩く理由は唯一つ。

全ては生きるため。

《side, out》

少年は歩く。

無限に広がる真っ白な世界と世界の狭間の世界を。

ただ生きるために。

ただ生きるために少年は歩き続けた。

それはもしかしたら100年かもしれない。

それはもしかしたら10年かもしれない。

それはもしかしたら1年かもしれない。

それはもしかしたら1か月かもしれない。

それはもしかしたら1週間かもしれない。

それはもしかしたら1日かもしれない。

それはもしかしたら1時間かもしれない。

それはもしかしたら1分かもしれない。

それはもしかしたら1秒かもしれない。

少年は歩き続けた。

少年は彷徨い続けた。

そして。

少年は門を見つける。

少年は門を見上げる。

それは見る者によつては死者の門であらう。

それは見る者によつては聖者の門であらう。

少年は門を見据える。

少年は門を両手で触れる。

少年は呟く。

「俺は何があろうと諦めない。俺は納得いくまで絶対に生きてやる」

少年は門を押す。

少年は門を開ける。

門からは膨大な力のある光が溢れだす。

真っ白な狭間の世界を膨大な力のある光が更に白く染め上げる。

少年は膨大な力のある光に臆せず光の中を突き進む。

そして。

少年は狭間の世界から消えた。

門は閉じられ膨大な力ある光も消えた。

真っ白な狭間の世界に静寂が舞い戻る。

真つ白な世界と世界の狭間の世界。

そこは人々が考え、畏れ、恐怖し、そして創造《想像》した『地獄』を神が利用し創つた世界。

そこはたった一つの存在を閉じ込める為の世界。

そこは魂の牢獄。

そこは魂の監獄。

そこへ入れる存在は誰もいない。

そこから出られる存在は誰もいない。

ただ。

1つの少年のような存在を除いては。
イレギュラー

第三話狭間の世界（後書き）

感想お待ちしております？

第四話回廊

少年は歩く。

輝きし生への回廊を歩く。

少年は決して歩むことをやめない。

少年は歩く。

世界と世界の狭間の世界の様な白ではなく。

白く輝きし浄化の回廊を。

歩き、歩み、歩く。

僅かに願う思いに従いながら。

少年は歩く。

そして。

少年は辿り着く。

《少年side》

俺は世界と世界の狭間の世界に在った門を潜る。

膨大な力のある光が俺を突き抜ける。

その光は俺を斬り、貫き、裂き、潰し、千切り、燃やし、凍らせ、苦痛を与えながら俺を照らす。

俺は耐える。

必死に痛みを耐えながら俺は歩く。

この光の中心へと歩く。

何故光の中心へ行くのかは俺にも分からない。

だが身体は歩く。

俺の意志とは関係なく身体は。

歩き、歩み、歩く。

俺の身体は、俺の意志ではなく俺の信念に従い。

生きるために俺の身体は真っ直ぐに光の中心へと歩く。

そして。

苦痛の光を発する小さな太陽の様なモノの前へと辿り着く。

辿り着くと俺の身体を動かしていた力が抜けるように無くなる。

俺は腕を自らの意志で持ち上げる。

この至近距離に居ると光には無いはずの圧力を感じ、苦痛が増加する。

まるで、今からすることを拒むように。

俺は苦痛に耐えながらこの小さな太陽に触れる。

手の皮膚が焼け焦げる感触と何かが手と通じ入ってくる感覚がすると同時に小さな太陽は砕けた。

いや、小さな太陽だけではない。

この白く輝く空間自体がヒビ割れ、そして砕けた。

俺は砕けた衝撃で目を瞑る。

そして、再度目を開くと周囲の景色が一変していた。

俺の周囲360度には1000m級の巨大な樹木が幾つも生い茂りその幹と根により複雑な迷宮と化している大地。

その樹木（針葉樹）の枝葉によりほぼ一切の日の光が入ってこない事により独特な景色（人間並みの紫に光っているキノコとか）になっている樹海。

そして、枝葉の間から微かに見える3つの月。

「……………は？」

俺は眩きと同時に周囲をもう一度見渡す。

見えるのは1000m級の樹が生い茂る樹海と発光するキノコ群（紫とか）と微かに見える大きな金色の月と小さな赫い月と碧い月のみ。

「……………どこだ此处？」

俺の眩きは樹海の中に消えて行つた。

《side・out》

少年は辿り着いた。

だが、少年は歩みを止めない。

少年は歩き続ける。

少年は自らが切り開きし道を歩く。

その道中で少年は大切なモノを見つける。

その道中で少年は大切なモノを思い出す。

だが、それはこの後に起こる物語。

これより始まるは生きるために『地獄』を喰らった少年の物語。

少年は生きる。

生きていれば何時か良い事があると信じて。

第四話回廊（後書き）

感想お待ちしております？

第五話結晶

俺の名前は北条凍夜^{ほくごうひやうで}。

ちよつと生への執心が人一倍強い唯の人間さ。

「……………む、抜けたか……………」

何が抜けたか、という事を説明するには時間を少し戻す。

あの後、俺は取り敢えず歩くことにした。

そして3日間飲まず食わずで歩いた。

今の身体は寝なくても食べなくても300年ぐらいは生きてられるからな。

それで、歩きながら色々考た結果。

此処は俺が居た元の世界じゃないっていう事を確信した。

何分かな〜り昔で曖昧な記憶だから断言はできないんだけど、あの世界にはこんなデカい樹木は無かったし発行するキノコ（蛍光ピンク色）もなかったと思う。

それで確信した最大の理由は確か元の世界の月は銀色で1つだったということをお願い出したからだ。

そついやあ〜趣味の1つに月見があつたよなあ〜『地獄』には月が無くてできなかったけど、今度やってみるかな？

閑話休題

そんで夜の暗闇の中、月明かりを頼りに樹木の根が張り出して造られた迷宮を道？なりに歩いていると周囲の樹木の樹高がだんだん低くなつてきて発行するキノコ（虹色）も少なくなってきた。

そろそろ抜けるかなあ〜？と考えていたら急に樹海が開けて草原

つばい所へ出たんだよ。
それがさっきのセリフだ。

「……ん？街道かな……」

よく見てみると此处、樹海と草原の境目から目測100m程先に舗装されていない道があった。

街道はそのまま樹海沿いに真っ直ぐ左右に進んでいて左の道は途中で草原の方に曲がって進んでいて右の道はそのまま樹海沿いに続いている。

草原の方には木と岩がポツリポツリと在るだけで特にコレといったものは無い。

「……まあ、何にせよ行動せんことには始まらないし……」

俺は境目から街道へ歩いて出る。

さて、此处で右か左に行くか決めんな。

「……面倒だから適当でいいか……」

そうこう考えている内に俺は道に辿り着いた。

道には一定の幅に溝のようなものがある。

何だろこれ？

「……えっと、知っているような……あ、馬車の走った後か……」

ということとは……此処の技術は中世並なのかな。

「……うーん、まあ歩いて行けばその内誰かに合うかな……」

あゝでもなあ。

此処では日本語は通じるのかな？

通じなかったらどうしようか。

「……まあ、今悩んでも仕方がないか。その時になったら決めよう……その前にやることもあるしな……」

両手を広げ身体を眺める。

俺の身体には『地獄』に堕ちる前に着ていた既にボロボロになった学生服が僅かに引っ付いている、という感じになっている。

「……これは着替えないと変質者に思われるよな……」

俺が警官だったらこういう恰好をした奴を見たら即行で捕まえるだろうからな。

「……着替えるか……」

俺は闇のようにも光のようにも見える炎。『混沌』を発現させる。

『混沌』は学生服を燃やしながら勢いよく燃え上がり俺を包み込む。

暫くしたら『混沌』の炎は消えてボロボロの学生服は真新しい服に変わっている。

「……うん、こんなんでいいか……」

今の俺の格好は黒い軍用ブーツを履き、銀色の膝当てが付いている黒い軍用ズボンを穿いて、ズボンを黒の多目的ベルトで留め、ベルトに多数のポーチをぶら下げている。
プロテクター

黒色の強化装甲が付いた白い長袖の軍用シャツを着ていて、腕には黒い手甲を着け、手には白い指貫の手袋を着けている。
その上に黒と白の二色の膝まである軍用コートを羽織って、肘に銀色の肘当てを着けている。

イメージとしては昔やったゲームに出てきたNCRベテランレンジャーだ。

背中には白と黒の鞘越しからでも分かる鎖で繋がれた禍々しくも神々しい片刃の大剣。

『世界に終りを齎す炎の剣』を担ぎ、腰には黒と白塗りの鞘に納まっている日本刀。

『圧切長谷部』をベルトに差している。

二振りとも『地獄』にいた時に戦利品として頂いた物だ。

「……さて、こんなもんかな……それじゃあ行くか……」

俺は特に理由なく決めた右の道を辿って歩く。

しばらく歩いていると、草原の方から何かがやってくる気配を感じた。

何かの気配は五つ。

五つの気配はかなり速い速度で俺に向かって着ているようだ。

気配の移動速度から人間ではないな。

足が速い……魔獣か。

俺は『圧切長谷部』略して『圧切』を鞘から抜き無造作に右手で持ちその場に立つ。

構えは不要だ。

構えがあると攻撃の選択肢が減ってしまう。

まあこの姿勢も見る人によっては構えなんだろうけど。

そう考えているうちに突然敵の動きが加速し、五つの気配が俺の間合いへ突っ込んできた。

俺は突っ込んできた敵を見据える。

敵は狼のような形状をしている。

全長は2m程で眼が本来ある所に四つと額にもう一つの合計五つあるがその他の姿は大して変りないと思う。

まあ『黒炎と毒液を撒き散らしす三頭犬』ケルベロスに比べたら………だけだな。

つと、考えている間に五匹の狼の内三匹が俺を包囲するように後ろに回り込んできた。

「……ふむ、退路を断つか、以外に賢いな。だが……」

今度はそのまま五匹の狼が地面を掛けて罅を拡げ襲い掛かってきた。

それに対して俺は無造作に右手に持った刀を振るう。

ポン

ベチャビチャ

そんな音が聞こえたと思ったら五匹の狼は口から尻尾の付け根まで斬り裂かれ地面に斃れ伏せた。

「……その程度の速さじゃ俺を殺せんぞ……」

そう呟き俺は刀をヒュッヒュッと左右に振り血払いした後鞘に納める。

「……さて、思ったより弱かったが……一応喰うか……」

俺は五つ目の狼を喰らうために『混沌』の炎を出そうと右手を翳そうとした時。

ピキ、ピキピキ、バスン。

という音と共に五匹の五眼の狼たちの体にヒビが入りそして砂となって砕けた。

「……あれ。砕けた……どういうことだ……」

俺が呆然と砂になった元五眼の狼を見ていると。

「……ん。あれは……」

何か砂の中で光るモノがあった。

俺は砂を掻き分け光っていたモノを手取る。

「……結晶？……」

光っていたものは大きさは凡^{およそ}5？程のダイヤの形をした傷の無い綺麗な透明の結晶だ。

「……ふむ、どういうことだろう……」

此処の魔獣はこういう風に死んだら結晶になるのかな？

「……まあ、綺麗だし持っていても損はないだろ……」

もしかしたら何処かで交換できるかもしれないしな。

そう結論付け、俺は他の結晶を集めてポーチの中に放り込む。
他に魔獣がいないか周囲の気配を読んでみるが。

「……他にはもういないな……」

俺はそう呟き。

砂をそのままに再び歩き出す。

第五話結晶（後書き）

感想お待ちしております？

第六話追剥ぎ

「……ん、あれは……」

しばらく歩いて空が白んできると、道の先から複数が隊列を組んで歩いている何かの気配を感じた。

肉眼ではまだ米粒ほどにしか見えないが気配は感じ取れる。

何かの隊列は前衛に三つだけでおそらく馬か何かに騎乗している様だ。

その後ろにおそらく馬車に乗った気配が二つ……いや三つか。

「……足は……遅いな……」

隊列を組んでいて馬に乗っているということは人かな。

んで少数の護衛で足が遅いということは個人経営の商人かな。

ということは先ほど手に入れた結晶の事を聞けるかもしれないな。

やっと商人と思わしき人たちの人影がハッキリ見えてきた瞬間。

商人と思わしき人たちの隣に複数の五眼の狼の気配が現れた。

護衛と思わしき三人は即座に対応して迎撃しようとしているけど

……これは数が違い過ぎる。

あつという間に五人は狼に殺されたようで気配が消えた。

「……残っている気配は……十一……いや十二匹か……」

俺は歩みを止めずそのまま馬車に近づく。

馬車の周辺には夥しい量の血で馬車と道が紅く染まっていて、馬と人と思わしき死体があった。

馬は既に骨だけになっており人の死体は現在狼たちに貪り食われている。

「……ふむ、この数を一々斬るのは面倒くさいな……脅したら逃げるかな……」

俺は狼どもに向かって威嚇の殺気を放つ。
すると。

バタ、バタバタバタ

という音と共に狼どもが全員口から赤い泡を吐きながら地面に斃れ伏せた。

まだ、ピクピク動いている所を見るに気絶か。

「……強すぎたかな……」

脅して追っ払おうとしたただけなんだけどな。
と思いながら止めを刺すため『圧切』を抜こうとすると。

ピキ、ピキピキピキピキ、バスンバスンバスン……

という音と共に斃れ伏せた狼どもが全員砕け散り砂になった。

……死んでいたのか。

「……こ、これは無闇に殺気を放てんな……」

人通りが多い所なら殺気を放っただけで大量虐殺をやっちゃまう。
俺は少し呆然としながらも砂の中から結晶を取りポーチの中に入れていく。

「……さて、と……」

そう呟き俺は狼に喰われた五つの死体の傍に近づく。

五つの死体は服を食い破られほぼ骨だけになっていた。

俺は死体に手を合わせ冥福を祈り。

「……さて、追剥ぎするか……」

使える物は使わないと後で困るからな。

そう心の中で言い訳をしながら俺は五人の死体からまだ使える物を剥ぎ取る。

五つ死体が持っていた物は大半が壊れていたり砕けている物だったが使える物も少しはあった。

おそらく馬車の荷台の鍵の束と、おそらくこの世界の通貨と思わしき銅貨420枚と銀貨30枚だ。

「……それじゃ、墓を作るか……」

俺は剥ぎ取った物をポーチの中に容れ、死体引きづり草原の方へ歩く。

10m程死体を引きずったまま歩き、草原に死体を下ろす。

そして地面に跪く様に手を当てて。

「……むん……」

という掛け声と共に地面を圧すと。

ズン

という重音と共に周囲の地面が盛り上り壁のようになった。

実際は俺の周囲の地面が陥没してその分の土が壁のようになっただけなんだがな。

俺は死体をその場に残し壁を跳び越えて向こう側に着地して。

「……はっ……」

という掛け声と共に壁を圧すと。

ガゴン

という重音と共に壁が内側に倒れ陥没した所を埋めた。

俺は土がまだ若干盛り上がった簡易の墓に護衛の三人の持ち物である剣と槍を付き刺し墓標にしてもう一度今度は墓標に冥福を祈る。暫く祈ってから俺は墓から立ち去り、馬車の荷台へと歩いていく。

ガチャガチャ、ガチン

俺は馬車の荷台の南京錠？の鍵を外し扉を開けて中へ入る。馬車の中には大きなガラス棚と三つの木箱が置いていた。その他にも空箱や空樽が荷台の至る所にある。

「……仕入れに行くところだったのかな……」

そう呟きながら俺はまず棚を覗く。

棚には様々な形の瓶が置いてありその中に緑や紫などのカラフルな色の液体が入っていた。

瓶にはその瓶の事を書かれた羊皮紙が張ってあったが俺には読めなかった。

その後棚にある引き出しも漁ってみるが出てきたのは羊皮紙の束と何かの草（おそらく薬草かな）しか出てこなかった。

俺は羊皮紙と草を引き出しに戻し次に木箱を開けてみる。

一つ目の木箱には麻袋が三つ入っていてその中に銅貨9580枚と銀貨2570枚と金貨1000枚が入っていた。

「……おお、結構あるなあ……けどこの量は運べんな……」

取り敢えず硬貨は置いて二つ目の木箱を開けると、中には二つの黒い腰袋（ポーチ？）と一枚の羊皮紙だけが入っていた。

「……あれ、これだけ？……」

思わずそう呟いてしまいながら俺は羊皮紙を手取る。

が、やっぱり文字は全然わからなかった。

まあ荷物を入れるのに苦労はしないかな。

俺は羊皮紙を木箱に戻し、木箱から二つの腰袋を取り出し他の木箱の上に置く。

「……さて、最後つと……」

そう呟きながら俺は三つ目の木箱を開ける。

木箱の中には緩衝材が一面に敷き詰められている。

俺は緩衝材を木箱から出しながら中の物を探す。

コッソ

「……っと、あったあった……」

俺は木箱から中であつた物を取り出す。

取り出した物は10?程で翠色の裸の少女の石像だ。

少女の石像は顔の彫りから背中を流れている長い髪から背中の中の薄い虫の翅のようなものまで精密に彫られていた。

「……ほう、凄いな……」

そう呟き俺は石像を他の木箱の上に置いて硬貨が入った木箱へ歩いて行く。

「……さて、入れるか……」

俺は麻袋の中の金貨を先程入手した腰袋に入れていく。
しばらく黙々と金貨を入れていたのだが。

「……あれ、重くならない……」

腰袋には既に50枚ほどの金貨を入れたのだが一向に重くならないのよ。

疑問に思つて腰袋の中を覗いてみるが、中は真っ暗で何も見えない。

「……ふむ、何なんだろう……」

多分先ほどの羊皮紙に説明が書かれているんだろうけど読めない

しなあ。

「……まあ、大丈夫だろう……」

そう結論付け、俺は金貨に続き銀貨と銅貨も腰袋に入れていく。結局俺は銅貨100枚と銀貨10枚と金貨1枚をポーチに移し、残りの硬貨を腰袋に入れた。

うゝむ、この腰袋一つだけで全部の硬貨が入っちゃったよ。
どれだけ要領があるんだよ。

「……まあ、いいか……」

そう呟き俺は薬品と思わしき瓶と羊皮紙を全てもう一つの腰袋に入れてから、二つの腰袋をベルトに付ける。

ついでに腰袋と一緒に入っていた羊皮紙を軍用コートの内ポケットに丸めてから入れる。

そして、石像も薬品を入れた腰袋に入れる。

「……さて、他にはないかな……」

そう呟き俺は周囲を見渡し他に取れる物はないかどうか見るが。

「……ない、な……」

俺は空箱に注意しながら馬車から出る。

外はやつと太陽が昇り切った様でサンサンと日光を降り注いでいる。

俺は墓の方を向きもう一度冥福を祈る。

そして、馬車をそのままに俺は再び道を歩き出す。

第六話追剥ぎ（後書き）

感想お待ちしております？

第七話入国（前書き）

第六話を編集しました。

- ・ 題名
- ・ 最後の数行
- ・ 妖精が消えました

第七話入国

「……あ、街だ……」

あの後、俺は道を歩いていると段々道が草原の方に向かって曲がっていた。

そのまま真っ直ぐ行くと何時の間にかあの無駄にデカイ樹海が無くなっていて周囲は草原に変わっていた。

俺はそのまま歩いていくと太陽が頂点に來たあたりで道から左へ逸れた地平線に塔の様な影が見えてきた。

影は歩いていくごとに段々大きく、ハッキリと見えてきた。

そして、俺が歩いている道がさらに大きく幅が広い道と合流し脇に商人や傭兵と思わしき馬車が幾つも通り過ぎた時に影が全てハッキリと見えた。

その時呟いたのが上の言葉だ。

ちなみに。

どうやら此処の言葉は通じるようだ。

通り過ぎた商人や傭兵たちの言葉を聞いていると分かったことだ。主に通行税が何たらだとか給料がどうたらとか雇い主がデブで厭らしい目つきで見てくるだとかだ。

ちなみに最後のは両方とも男だ。

閑話休題&合掌

俺はそのまま道を歩き街の城壁に辿り着く。

どうやら此処は城塞都市もしくは城塞国家といった感じかな。

大きな正門には沢山の馬車が並び順番を待っている様だ。

通用門の様な正門より小さい門には傭兵風の馬車に乗っていない

人たちが列を成して並んでいて門衛に銀貨5枚を渡して中に入っているのが見えた。

「……ふむ、あれが通行税なのかな……」

俺はそう呟き列に並ぶ。

しばらく並んで待っていると俺の番になった。
門衛の兄ちゃん俺を見て驚いたような反応をした後、表情を改め。

「ようこそ、グリーンルへ。まずは通行税として銀貨5枚を支払ってください」

俺はあらかじめ準備していた銀貨5枚を門衛へ渡す。

「たしかに。それではギルドカードを持っていましたらそのまま通過してください。持っていない場合は通行書を発行いたしますので名前を教えてください」

ギルドカード？

そんなモノがあるのか。

あつたらそのまま通過できるって言うけど持って無いしな。

「いえ。持っていないんで通行書をください。名前は北条凍夜です」というと門衛は不思議そうに俺を見ながら。

「ホクジヨウトウヤですか。変わった名前ですね」

と言ってきた。

変わった名前？

……ああ、コッチは欧米風の名前なのか。

「あ、自分の国では家名が前で名前が後ろなんです。だからコッチ風に言くとトウヤ」ホクジヨウですよ」

と慌てて訂正すると門衛は珍しいモノを見たっていう顔をして。

「へえ。そうなんですか」

と相槌を打ってきた。

「それでは次に、出身地は何処ですか？」

む、出身地か。

うゝむ、嘘八百で乗り切るか。

「出身地は遠い東にある島国です。何分国を出た時はまだ幼かったものですから名前は覚えていないんです」

まあ全部が全部嘘じゃないんだけどね。

門衛はその後色々聞いてから後ろの守衛室の様な部屋に戻り羊皮紙を持って戻ってきた。

「では、これが通行書です。この通行書は身分保証書になっていますので無くさないようお願いします。また、ギルドカードを発行す

る場合にも必要になりますので携帯しておいてください」

門衛はそう言いながら俺に通行書と思わしき羊皮紙を渡してきた。
俺は羊皮紙を。

「ありがとうございます」

と礼を言いながら受け取り軍用コートの内ポケットに入れる。
門衛は少しの間キョトンとした顔をしたが直ぐに表情を改め。

「この国の簡単な見取り図は此处を出てすぐの広場にありますので
そこを参照ください。それでは改めまして、ようこそグリーンへ」

と言いながら微笑む。

俺は門衛に愛想笑いを浮かべながら通用門を抜け街へと入る。

門を抜けるとそこは中央に大きな噴水があるかなり広い広場だった。

広場の外縁には沢山の屋台があり、噴水の外壁にこの街の地図が
張り出されていた。

まあそんな物より目立つのが。

屋台で色々な物を買って噴水近くに置かれているベンチや椅子に
座って食べている多種多様な人種だ。

人間はもちろんエルフやらドワーフやらケットシーやらフェルパ
ーやらの種族が沢山いた。

「……ほお、まさにファンタジーだな……」

俺はそう呟きながら地図のところまで歩いていく。

地図には俺の他にも傭兵の様な人たちがいて、地図を眺めている。地図によると、この国は全部で四つの地区に分かれていて、中央が王城、その次が貴族街、その次が裕福街、その次が一般街という感じだ。

外に行くほど面積が広くなっていく感じた。

まあこれは全部感なんだけどね、だって字読めないし。

地図には何やら色々補足が書いているが読めないので俺はそのまま広場を横切りギルドとかいう建物を目指す。

なぜ、ギルドの場所を知っているかというところ、一般街の中で1つだけ建物の絵が描かれていたからな。

多分これだろう。

俺は人に当たらないようにしながらギルドへ向かって歩いていく。周囲には人々の喧騒と屋台や出店の客寄せの音が響き渡っている。それを聞き流しながら歩いていると。

「いらつしゃい！いらつしゃい！この度は新製品！！なんでも入る不思議な袋！！『セリオ口』を大量入荷したよ！！この袋！！重さ関係なしに何でも入る不思議な袋！！取り出すときは袋に手をつ込んで取り出したいものを言うだけで良いっていう優れものだよ！！」

「しかも！しかも！！中の空間は時間のながらが遅いから生物の保存にも便利だよ！！さあ！！これだけの代物がたった金貨1枚！！今買わなきゃ損だよ！損！！」

という何とも聞き捨てならない客寄せの言葉が聞こえてきた。

俺はその言葉が聞こえてきた方を見ると、その屋台には俺が腰に下げている腰袋と同じ形の袋が積まれて置いていた。

ふむ、ということはこの腰袋とあの売り物の『セリオロ』は同じ物か。

「……………これはいいこと聞いた……………」

と呟き若干足取り軽やかにギルドへと向かう。

第七話入国（後書き）

感想お待ちしております？

第八話ギルドその1

「……ふむ、此処がギルドか……」

俺はギルドと思わしき建物の前に来ている。

ギルドの建物は雑把に言うところ庭の無い宮殿だった。

他の建物よりも頭二つ分くらい高い、けど窓が他の建物と一緒に三つしかないところを見るに天井が高いのかな。

建物の外見は宮殿のようで入口に大きな看板があり多分そこにギルドって書いてんだろうけど俺には読めんしな。

建物の屋上には盾と剣と杖と大きな龍の紋章が描かれた垂れ幕が下ろされている。

多分此処がギルドで合っているだろう。

だって傭兵風の人やローブを着こんだ人が大勢建物に出入りしてるからな。

「……さて、入るか……」

俺はおそらくギルドの大きな正門を通り中に入る。

中は二階の天井をぶち抜いて作られた大きなホール？みたいな感じで酒場と併合しているみたいだ。

俺はそのまま真っ直ぐ歩き受付と思わしきカウンターまで歩いていく。

途中誰かに見られている気配が幾つもあったが全部無視した。

視線の主を軽く見たが大した実力は持っていなかったからだ。

そんな視線を無視しながら歩いてカウンターに行く。

カウンターは左右に仕切りが置かれていて周囲からは見えないようになっている。

「あ、ようこそ。冒険者ギルドへ」

と書類仕事をしていた銀色の髪の受付嬢が俺に気づき、ニッコリと笑いながら言ってきた。

ふーん、傭兵じゃなくて冒険者ギルドなんだ。
そう思いながら俺は用件を言う。

「ギルドに登録したいんですが」

「はい。新規登録でよろしいですね？」

うん？

新規以外にもあるのかね。

まあ今は関係ないか。

「はい。それでお願いします」

すると受付嬢は何やらキョトンとした顔をしていた。
はて、何かおかしなことを言ったかな。
と思っていると受付嬢が焦ったように。

「あ、失礼いたしました。少々お待ちください」

と颯爽とカウンターの奥へ行き、5?程の黒い水晶球? を持つて戻ってきた。

「では通行書をお出してください」

「あ、はい。どうぞ」

俺は軍用コートの内ポケットに入れていた通行書を取り出し受付嬢に渡す。

受付嬢は何やら珍しいとでも言いたげな表情をしながらも通行書を水晶球に押し当てる。

すると、通行書が水晶球の中に吸い込まれているじゃないか。

おお、なんか凄いな。

あの水晶球ってどうなってるんだろう？

そんなことを考えていると受付嬢が。

「はい。これでああなたの情報をカードに登録しました。次に此方の羊皮紙に必要な事項をご記入ください」

と受付嬢はカウンターの下から羊皮紙と羽ペンを取って俺に差し出してきた。

あゝ、どうしょ。

此処の字は書けないんだけどなあ……代筆できるかな。

「すみません。俺字が読めないんで代筆してもらってもよろしいですか？」

すると。

受付嬢はクスリと笑ってから。

「はい。いいですよ。では私が読みますのでそれにお答えください」

「はい。お願いします」

と言いながら若干頭を下げる。

するとまた受付嬢がクスリと笑って羊皮紙を読み始めた。

……何で笑ったんだろうか。

うーん、分かんないな。

まあいつか。

そんな疑問を抱えつつ俺は受付嬢が呼んでくれる羊皮紙の必要事項に答えていく。

ま、ザックリ言っちゃうと、羊皮紙にはギルドの依頼中に怪我や死亡しても自分で責任を取るべし。

っていう感じのギルドに責任はありません。

という契約書？　みたいな感じだった。

俺は早々に死なないから大丈夫だろう。

ていうか死なん。

無駄死しは俺の信条に反するからな。

そう思いながら受付嬢に同意の言葉を書いてもらった。

ついでにギルドでの注意事項的な説明もしてもらった。

ギルドは基本的に街の住民からの依頼や領主からの依頼を受けて、その依頼を達成する。

っていうのが基本的なことで、その依頼の種類は大雑把に分けて、町の住民の手伝いの雑務系。

魔物がいる森などから薬草などを採ってくる採集系。

商人や荷物の護衛をしながら街から街へ移動する運搬系。

魔物を討伐してくる討伐系。

という感じだ。

雑務系は町の住民の例えば屋根の修理とか引越しの手伝いとからしい。

冒険者の間では全く人気のない仕事だとか。

採集系は薬草などを採ってギルドに持ってくるというモノらしい。余分に採ってきたらギルドが買い取ってくれるらしい。

運搬系は荷物を持ってか商人を護衛しながら目的地に行き荷（商人）を届けるというものだ。

依頼を終えたらその街のギルドで報酬を受け取れるみたいだ。

討伐系に関しては斃した魔物から出る結晶。

この世界では魔結晶と言うらしいが、その魔結晶が討伐した証になるみたいだ。

魔結晶は討伐の証だけじゃなくて普通に硬貨と換金してくれるみたいだ。

冒険者の中には魔物から採った魔結晶で自作の武器を造る人もいるそうだ。

そして、ギルドにはランク付けがあってランクはFから始まりF、F、F、FそしてEと上がって行き最終的にはSSSまでであるらしい。

依頼は現在のランクの最大二つ上までのランクの依頼が受けられるみたいだ。

ランクを上げるにはなんか色々と条件があるらしいがその辺は割愛だ。

ついでに、SSSはほとんどが英雄的な実績を上げた人になる特別ランクとかでかつてこのランクになった人は片手で数えるぐらいの人数なんだとか。

現在はどっかの国の騎士と魔術師がSSSになったとかいう噂だそうだ。

閑話休題

その他にギルドには依頼の報酬から手数料や利用料が引かれるだの色々な説明を受けた。

説明を終えた受付嬢は先程の羊皮紙をまた水晶球に押し当てて水晶球の中に入れた。

ホント、どうやってるんだろうね。

「では。最後にステータスを測定しますよ。こちらの水晶球に触れてください」

俺は受付嬢に促されるままに水晶球に触れる。

すると、水晶球に何やら大量の文字がスクロールされている。

受付嬢はその水晶を見ずにカウンターの下でゴソゴソと何かを取り出そうとしている。

水晶の文字のスクロールが終わり元の水晶球に戻った時に受付嬢が薄い鉄のプレートをカウンターの上に置いた。

「もう少しお待ちください」

そういうと受付嬢はその鉄のプレートの端に水晶球を乗つけると水晶球がプレートに沈み込んでいった。

すると、今まで白紙？ だったプレートに此処の世界の文字が浮かび上がってきた。

「……………おお……………」

つと、不覚にも驚きを呟いてしまった。

受付嬢は何故かクスツと笑った後。

「はい。大変お待たせいたしました。こちらがギルドカードです」

「あ、はい。ありがとうございます」

ちょっとテンパっちゃったかな。

そんな俺を見て受付嬢はクスクスと笑っている。
ちくしょー。

「では、ギルドカードの注意と機能の説明をいたしますね」

と説明をしてくれたが長かったのでザックリ纏めると。

まず注意として第一にカードを紛失した場合は罰則金と再発行料として金貨3枚を払わなければならないみたいだ。

第二にカードの二重登録をした事が後に発覚した場合に罰則金としてこちらは金貨5枚を支払わなければならないらしい。

第三にカードを解析、または解体、複製した事が後に判明した場合、罰則金として金貨100枚と無期限のギルド追放とするみたいだ。

以上が主な注意事項だった。

次にカードの説明をしてくれた。

第一にまずカードには名前と性別と種族とランクが書かれていた。名前と性別と種族は言うまでもないな。

ランクはやっぱFだった。

まあ当然だよな。

ついでに言つとくこの時に大体の文字が分かってきた。

文字は形は違うけどほとんど日本語と同じだった。

ランクはアルファベットだけど。

ただ、漢字は無く全部平仮名という感じだ。

そのせいで羊皮紙の量が膨大になるんだとか。

閑話休題

第二に各ギルドの設置している魔導装置にカードを入れるとステ

ータスが見れるそうさ。

ステータスには先ほど言った名前、性別、種族、ランク以外に出身地、装備品、保有能力、体力「HP」、魔力「MP」、力の強さ「STR」、器用さ「DEX」、頑丈さ「VIT」、俊敏性「AGI」、知能「INT」、精神力「MND」、魅力「CHR」、幸運「LAC」といったものが表示される用だ。

昔はこれもカードに表示していたそうなんだが量が膨大になって色々大変だったそうで、何百年か前にギルドの据え置き装置のみで見れるようにしたそうさ。

分かりそうなものは置いとくとして、分かりにくいのをザックリ纏めると。

保有能力はその人が持っている能力の事。

この能力は特殊能力みたいな感じで色々な超常的な事を起こせるらしい。

詳しいことは教えてくれなかった。

ちなみに、能力については記録がある限り千年前から研究が続けられているそうだが、まったく何も判明していないそうさ。

そのせいで今更研究しようとする人は居ないらしい。

もう、これはこういうモノだ。

というのが周知の事実になっているらしい。

その後のステータスを数値とランクで表示したものらしいが、数値やランクはあくまでも目安らしい。

ちなみに、ギルドで発行している本には今まで発見された能力を一覧に出しているらしい。

値段は銀貨35枚と銅貨200枚。

正直言っただけどうか分からんな。

ついでに言っとくがどうやら此処の通貨は銅貨1000枚で銀貨1枚、銀貨1000枚で金貨1枚、金貨100枚で白金貨1枚らしい。

閑話休題

第三にこのカードがあると都市や国境を越えるときに通行料を払うだけで通過できるそうだ。

まあこれは門で聞いたしな。

あまり関係ないな。

その他にも国営の図書館や訓練所等にも出入り出来るようになるみたいだ。

「ふう、沢山喋りましたが以上で説明を終わります。何か質問はありますか？」

うーむ、特にないな。

……あ、宿の場所を聞いとくか。

「では。この近くでご飯が美味しい宿はありますか？ 出来れば寝床も良い所が良いんですが……」

それを聞いた受付嬢はクスクスと笑いながら。

「それでは当ギルドに宿泊いたしますか？ 宿泊費は高いですがそれ相応のご飯とベットをご用意させていただきますよ？」

説明で宿泊もできますよって言いましたよ。

とクスクスと笑いながら言ってきた。

うーん、まあこれから外に行くのも億劫だし、此处でいいか。

……まあそれは良いとして、何で笑うんだろうか。

女性は不思議だな。

「ではお願いします」

「はい。畏まりました。それでは何泊いたしますか？」

何泊にしようか。

取り敢えず何泊でもいいんだけど……。

たしか旅人の三日間ルールってのがあった様な無かった様な……。まあ三日間、二泊でいいか。

「取り敢えず今日と明日の二泊をお願いします」

「はい。畏まりました。それでは御一人様で三食の二泊で宜しいですか」

「はい。構いません」

「それでは料金は前払いとなっていますので銀貨1枚をお支払いください」

俺はポーチから銀貨を1枚取り出し受付嬢に渡す。

受付嬢は銀貨を受け取りカウンターから鍵を取り出し俺に渡しながら。

「確かに頂きました。それではこれがお部屋の鍵になりますので無くさないように気を付けてください」

俺は鍵を受け取る。

「お部屋はその階段を上りまして手前にある廊下を左に曲がって道なりに行った先にある一番奥の部屋「306」号室です。それでは私たちギルドは将来のあなたの活躍に期待いたします」

と言い頭を下げてきた。

「こっちこそ新人ですがよろしく願いします」

と言い頭を下げる。

すると。

受付嬢は何となく驚いているような顔をしている。

うーん、さつきから気になっていたけどなんでそんなに驚くん
だる？

……聞いてみるか。

「あの、どうしたんですか？」

「い、いえ。ただ冒険者の方が私たちの様な従業員には傲慢な態度
を取る方が殆どなのでちょっと驚いてしまいました」

と照れくさそうに言う受付嬢。

俺は受付嬢に適当に返事をしてカウンターから離れ、カウンターの隅に置かれている魔導装置まで歩いていく。

第九話ギルドその2

「……ふむ、これが……」

俺は今、魔導装置の前にいる。
魔導装置の形はえっと、あれだあれ。

「……そうそう、ATMの形に似てんだ……」

ATMみたいな魔導装置には液晶画面と思わしき画面とカードをはめる台座があった。

「……さて、見てみるかな……」

俺は魔導装置の台座にカードをはめる。
すると。

魔導装置に液晶画面にズラッと此方の文字で書かれた俺のステータスが表示された。

《ステータス》

名前：トウヤハホクジョウ

性別：男

種族：人間

ランク：F

出身地：東の遠い島国

装備品

> 武器

・主武装：世界に終りを齎す炎の剣
おしきりはせへ
：庄切長谷部
レイヴァティン

・副武装：無し

> 防具

・頭：無し

・胴：防刃シャツ

：防刃コート
：強化装甲服
パワーガードアーマー
エルボーフロテクター

・腕：防刃グローブ

：肘防具
：手甲強化装甲
アームパワーガード

・腰：多目的ベルト

：ポーチ

：セリオロ

・脚：防刃カーゴパンツ
：強化装甲敷きブーツ
パワーガード
ニーフロテクター

：膝防具
：脚強化装甲
レッグパワーガード

保有能力

> 『混沌：EX』

- ・全ての起源にして終焉

> 『隠者：SS』

- ・気配をほぼ完全に絶つ。
- ・気づかれ難くなる。
- ・記憶に残り難くなる。

> 『気配察知：A』

- ・周囲の気配を察知する。
- ・周囲の生命体、異端、霊的存在の位置を補足する。
- ・範囲は周囲数？を含む。

> 『神殺：SS』

- ・神性を持つ敵に対してクリティカル率を増加させる。
- ・神性を持つ敵の耐性をランダムに一つ無効にする。
- ・神性を持つ敵の不死性を無効にする。

> 『生存本能：EX』
バットステータス

- ・あらゆる状態異常に対して絶大な耐性を得る。
- ・首だけになろうとも数時間は生きていられる程の生命力を得る。
- ・自分に対する命の危険に対して非常に敏感に感じ取る。

> 『対魔力：B』

- ・第三節以下の魔術的攻撃を無効にする。
- ・自分に対する外敵魔力に対して絶大な耐性を得る。

> 『直感：A』

- ・戦闘時に常に自分に対しての理想的な局面を感じ取る。
- ・自分に対して迫る危険に対して非常に敏感に感じ取る。

- ・視覚、聴覚に対しての妨害を半減させる。

> 『精神堅硬：A』

- ・精神面によるあらゆる干渉を完全に無効にする。
- ・異性や金品、魔術による負の誘惑を完全に無効にする。

> 『防壁破壊：A』

- ・自分が認識している武器に魔力防壁を破壊する効果を得る。
- ・失敗しても魔力防壁の耐久性を減少させる。

> 『駿足：A』

- ・神速を誇る脚力を得る。
- ・空中以外の如何なる地形、足場に対応し初速から最高速の疾走、緩急自在の制度、予備動作無しの流れるような方向転換が可能になる。

> 『武練：A』

- ・無双を誇る武力を得る。
- ・心技体の完全な合一により、いかなる精神的・肉体的制約の影響下にあつても十全の戦闘能力を発揮できる。

> 『野生：A』

- ・自然の中に溶け込める体質を得る。
- ・五感が発達し、獣と心を通わせれる用になる。
- ・自分に対する害意に対して非常に敏感に感じ取る。

> 総合ステータスの目安値

- ・体力「HP」：99999/99999（EX）
- ・魔力「MP」：99999/99999（EX）
- ・力の強さ「STR」：99995841（EX）

・器用さ「DEX」：99999875（EX）
・頑丈さ「VIT」：99998547（EX）
・俊敏性「AGI」：99998742（EX）
・知能「INT」：99998754（EX）
・精神力「MND」：99998753（EX）
・魅力「CHR、H（M）」：25（FF）（125658（S））
・幸運「LAC」：30（FFF）

ふむ、なるほどな。

ステータスには受付嬢の説明通りの事が表示されているな。

ステータスは特に変わったことは無い……ちよつと凄いな。

スキルや能力は殆ど無意識で使ってるものだったから今まで使った記憶が無いな。

けど、思い返してみると使ってた気がする……かな。

ああ、あと目安値の最後の項目の魅力と幸運が少し、いやかなりへこんだ。

やっぱり俺にはないのかなあ。
はあ。

閑話休題

それにしてもホント、この世界は凄いな。

元の世界にはない法則だよなあ。

ああ、そうそう。

ステータスを見てて分かったけどこの世界には魔術があるみたいだ。

使ってみたいな。

今度受付嬢に聞いてみるかな。

そついや、受付嬢の名前聞いてなかったな。
まあいつか。

さて、この後どうしようか。

「……取り敢えず。部屋に行ってみるか……」

俺は魔導装置にはめているカードを取ってコートの内ポケットに入れてから振り返りギルドの入り口の左隣にある階段へ歩いていく。その後は受付嬢が言った道順に歩いて行ったら部屋に到着した。

「……ここか……」

俺は受付嬢から受け取った鍵で部屋の鍵を開けて中に入る。

部屋の中はシンプルで六畳くらいの部屋にベットとソファと机と本棚と本があるだけだ。

さて、まだ昼ぐらいだけだ。

「……寝るか……」

そつ呟き俺は武器と服を脱ぎ机やソファに置いて下着一丁になつてから自身に『混沌』の炎を灯す。

『混沌』は直ぐに消え代わりに俺は紺の作務衣を着ている状態だ。俺はベットにダイブし。

「……zzzzzz……」

即行で寝た。

だって5000億年以上ぶりの睡眠なんだからな。

こうして俺のグリール滞在一日目が過ぎて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0927q/>

地獄からの生還者

2011年10月7日21時46分発行